



文部科学省  
IB教育推進コンソーシアム

## TEACHER TESTIMONIAL



### 井場恒介氏(大阪教育大学附属池田中学校)

昨年まで12年間公立中学校に勤務し、今年度より自らの希望により大阪府の人事交流にて、現在の学校に赴任。数学科で1年生図形と3年生代数を担当。

「他教科とも繋がるIBの概念で、より能動的な学びを促進」

IB教育は教科を通して人としての生き方を学べるという  
わくわくするようなイメージ

私はIBという言葉については3年前に現在の学校の研修で知り、実際のIB教育については、IB認定校に異動された元同僚の先生方から、いろいろなお話を聞きました。それを聞いて、とても面白そうだと思い、自らの希望でIB教育を導入している現在の学校で教えることになりました。教壇に立つ中で、IBはまず楽しいという思いが一番にあります。数学を教えているというよりも、「教科の上にある生き方」を、数学という教科を使いながら一緒に学んでいるというイメージがあり、すごくわくわくしています。従来自分が教えていた教育とIB教育で違うのは、ユニットプランナーを作成し、単元を構造化することにより、単元全体を見通した上で指導ができる事です。さらに、「探究テーマに向けてどう問いを立てて進めていくか」「ATLスキルをどう育むか」を考えることになり、一つ一つの授業が変わってきたことが全然違いますね。

受験のためだけの教育は、以前から自分には腑に落ちない所がありましたが、IB教育を知ると今までの自分の教え方は、実はIBに近い教え方だったような気がしました。今までも自分で問いを見つけ出したり、現実の問題と関連付けたりということが好きだったので、そのように教えてきたのです。IBに出会ってから、11月には、研究発表をさせていただきました。そこでは、ボロノイ図(トンボの羽やキリンの模様等)についての探究を1年生の平面図形の学習で扱ったのですが、学習をユニットプランナーに組み込んでいくことで、単発の授業で終わる

ことがなく、単元で教えていけるようになりました。

生徒による自発的な関係性の発見はIBならではのもの

他にも、例えば数学の空間図形の授業では、「ものの見方」と「単純化」について探究テーマを組んでいます。その授業では見取図と展開図、投影図が関連づいている探究の授業をします。IBを最初から勉強できる1年生には、計画的に問いかけをするようにしていました。それにより、生徒には考える力が育ち、図形を観察する際には、図形の構成要素を考えるようになっていきました。また、IBには他教科とつながる共通の概念があり、生徒達はそれを知ることによって、より学びが深まります。OPPシート(一枚ポートフォリオ)による振り返りの際には、生徒が地理で学んだ「メルカトル図法、正距方位図法」の関係性は、数学の授業で学んだ捉え方と同様に成り立っている」と繋ぎあわせることができたのです。教科横断的な授業はこれまででもしてきましたが、IBだからこそその学びがありました。

これまでの教科横断的な授業では、日本とアメリカとの常識的な違いとしてインチとセンチ、ポンドとグラムの違いを、どんな数式で変換させるかなど、AETの教員と一緒に考えて、半ば無理やり繋げるということもありました。しかし、IBでは重要概念を基調として考えることができるので、生徒が自発的にその共通性に気が付いて関連性を見出すようになってくれました。コーディネーターの先生を始めとして、当校の先生全員で概念に関する授業を行なっているので、生徒は自ら探究することが習慣付けられています。

## 授業をする際に心がけている事と 評価へのアプローチの違い

私は生徒が前のめりになるような、わくわくする教材を出し続けることが一番かと思っています。ボロノイ図の授業をした時も、ネズミの縄張り争いを垂直二等分線で引き、それがキリンのボロノイ図とどう関連するのか、生徒から積極的に発言がありました。生徒のそういった前向きな学びの姿勢を感じ、他教科にもどんどん結び付けたいという気持ちを持つようになりました。他教科の先生も忙しくされていますが、そういった話を始めると、一緒に実践してみたいと話が止まらなくなります。それから先生方の授業を見せていただき、協働の学びができないかと探すようになりました。IBを通して、教科を超えてのコミュニケーションが取りやすいと感じるようになりました。このように、学校にIB教育を導入することで、教員同士のコミュニケーションはかなり向上すると思います。特に本校ではIDU(学際的単元)にも力を入れていて、次はどうかという計画が自然にできます。

IBではどうしても課題が多くなるので、子どもがそれに追われているという意見もありますが、コミュニティ・プロジェクトなどでは、自分の子どもの活動を見た保護者の方から「ここまでしていただいて、ありがとうございます」と感謝の言葉をいただく事が多いです。評価に関しても、IBには、明確なルーブリックがあり、生徒にもきちんと伝えられるのでとてもありがたいです。数学の課題の評価へのアプローチ内容についても、より詳細なものが出せるようになりました。フィードバックに関してルーブリックを元に、課題に対して数値と共にコメントを返すことができるので、生徒も理解しやすいです。出された評価とコメントを見て、「評価は変わらなくていいのでもう一度提出したい」と申し出た生徒もいました。これはすごい事だと思いました。

IBは学び方を学ぶと聞きますが、正にその通りではないかと思っています。IBではない教育は受験に向けての勉強という色合いが強く、苦手な部分を学校や塾で指摘され、解法通りの解き方をするという受け身的な学びが多いかと思っています。しかしIBの中では、分からないことを学んでいくにはどうすればよいかを探っていきます。答えを提示する事が全てではなく、生徒が分からない場合は、「ではどうしたらいいの?」「どの部分が分かって

いるの?」と問いかけます。それに対して生徒は「できない事をどうすればよいか」と考えるサイクルができます。他には、ユニットの最後に取り組みIBの総括的評価課題というのは楽しいものであるべきで、自分のできることを十分に活用して表現するといった課題であると思っています。そんな課題の中で、生徒が難しいと感じる時は、他の生徒と聞き合うというコミュニケーションが増えていると感じます。

## IB教育に関心がある方々への メッセージ・アドバイス

IB教育を導入する事で、教員はしなければいけないことや考えなければいけない事も増え、忙しくなることもあります。しかし、子どもたちにとって、より良い教育を提供できるこのIB教育を導入することは良いと強く思います。今後の自分のキャリアがどうなるかわかりませんが、またIB校で働きたいと思っています。

IBの授業を通じて、教師側が作為的に繋ごうとしなくても、生徒たちは教科を超えて学習を自然につなぐことができ、そんな姿に成長が見えるので彼らの将来がとても楽しみです。単元を構成するユニットプランナーや指標が決まっているルーブリック作成は、最初は理解して読み取るまでが時間がかかりますが、きちんと単元を計画すればそれを使って学びを深く進められると思います。

IBで学んだ事を元に、子どもたちはどんな物事にも対応できる人になるのではないかと思います。事象に対して自分の概念を発揮させながら、何かを成し遂げる人になってほしいです。数学で例を挙げると、パターン化が大切ですが、彼らは複雑なものでもパターン分けして考えて、解決する事ができるようになると思います。

IBに関心がある教育関係者の方は、IBを導入している学校に実際に行って、授業を観察して、じっくりと生徒達の学ぶ姿を見て取ることが大事かと思っています。私自身、この学校に来る前にIBに関していろいろ検索しても最初は理解が追いつきませんでした。しかし、実際に自分の眼で見て体感する事で理解が深まりました。まずはIB認定校への訪問を、是非おすすめしたいです。